
星降る森の約束

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る森の約束

【Nコード】

N5654N

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

砂漠の王国ベツヘルムで、雑貨屋を営む錬金術師のネリー。上級者貴族出身だが、家族と仲違いをし家出中。錬金術の腕前は、超一流。普通の慎ましやかな生活を望む彼女の元に、ある事件解決の依頼が舞い込んできて、非日常へ足を踏み入れる事になって?!…：平凡な生活を渴望する天才錬金術師の物語。「錬金術師ネリー パルの置き土産」（完結済み）に続きます。精霊王とルシーダと世界観を共有してます。

星降る森の約束 1

「でねえ、なかなか眠れないのよ。なんかない？」

店のカウンターで、マルガリータはひじを突いたまま深いため息をついた。カウンターの中で、私はマルガリータの症状を書き記していた手を止めてマルガリータを見た。

こここのところ夜なのに気温が高い。寝苦しくて眠れないと、マルガリータは言っている。

私は、三方の壁が棚に囲まれた部屋の小瓶がずらつと並ぶところへ視線を向ける。そこから一本の瓶を取り上げた。

「これ、ラベンダーの香りをつけた油。寝る前に、胸から鳩尾にかけて塗るといいよ」

私は遮光瓶の蓋をあけた。とたんに、ラベンダーのいい香りが広がった。マルガリータに手渡すと、マルガリータは小瓶に鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。悪い香りではなかったようで、にっこりと笑った。「眠れそうないい匂いね。いくら？」

「五ダハブ」

香油で金貨五枚というのは、相場だろう。ラベンダーはこのあたりではエルフが住む「暁の森」でしか採取することができない。

「油は、アーモンド油を使っているから、酸化しないうちに早めに使い切つてね」

小瓶に封をして、マルガリータに手渡す。代わりにマルガリータが金貨を五枚手渡す。

「はい、丁度いただきました」

「恋に効く薬とかないの？」

マルガリータの質問に、私は返答に困った。大陸広し……いや、世界広しといえども、恋につける薬など存在しない。薬を付けられないから、勝手に熱が上がるのだ。

「どういう効果がほしいのか、具体的に知りたいな。たとえば、絶

世の美女になつて世界中の男をひれ伏せたいとか、好きな人に良い印象を持ってもらいたいとか」

「良い印象を持たせたいの。私って、どうも『怖い』って思われるみたいで」

マルガリータは、宮廷魔術師の一人だ。しかも、その中でも優秀な者でしか入隊できない「第一師団第一部隊副隊長」という肩書きつきだ。今も、第一師団第一部隊の証である、白色を基調とした隊服を着用し、胸には副隊長の証のヤシムで出来たブローチが飾られている。定番の魔法の杖は、真珠がいくつも杖の天辺に飾られた美しい杖だ。容貌は、十人が十人とも「美人」と答えるほどの赤毛の繊細な美女なのだが、白色の隊服のせいで、男達は腰が引ける。

第一部隊副隊長の異名は、「白銀の鬼」だ。マルガリータは、運動神経もいいので棒術を併用して敵を倒していく。それが、護身用の棒術といった可愛らしいものではなくて本格的に修行をした者の身のこなしなのだ。

マルガリータは、魔法で敵の目をくらまして、魔法を使って風のように速く相手の懐に飛び込み、魔法の杖で思いつき相手をぶちのめす、というのが基本戦法だ。また、古代魔法の名手でもあるので、古代魔法を使うこともあるのだがまったく知らない人が聞いたら、古代魔法の呪文はうなり声にしか聞こえない。かくして、赤毛の繊細な美女は隊服の白さと、閃光の魔法の光の輝きから「白銀の鬼」という二つ名をつけられたのだった。

「うん、それはマルガリータが容赦しないからだよ」

宮廷魔術師同士の訓練という名目で勝ち抜き対抗戦をしたところ、基本戦術で容赦なく仲間を伸していった、というのだから半端ないもつとも、第一部隊隊長にあつさりとマルガリータは伸されたというのだから、上には上が居るものだ。

「相手はどんな人なの？」

なんでもはつきりと答えるマルガリータには珍しく、言葉にならない声を発している。

まさか、古代魔法を唱えてるとか言わないよね。

「実は名前を知らないのよ」

マルガリータは、困ったように言った。

「どんな人？」

商売柄、宮廷で働いている人も相手にすることもあるから、みつけ出せるかもしれないと私は尋ねた。

「宮廷騎士の一人よ。多分、王都警備隊の人だわ」

王都警備隊といっても、それこそ三百人はいるのだ。仮に、年齢的に対象外だったり、既婚者だったり、同性だったりして半分が候補から外れてもまだ、百人以上の候補がいるのだ。

もつと特徴がないと力にはなれない。

「御前試合で、私の異名を知っても鬼には見えないと、いつてくれた人なの」

マルガリータのことだから、御前試合でも全力で戦ったのだろう。それで、鬼には見えないとは、なかなか骨のある人物のようだ。

「なにか良いことが思いついたら、連絡する」

マルガリータの恋は応援したいけど、ぴったりの商品はないみたい。マルガリータは、連絡を待っていると、帰っていった。

私は、客足が途絶えたので、マルガリータの役に立ちそうな商品開発のために、店舗の奥にある制作部屋に移動した。

店舗には、あらかじめ客人が来たらベルがなるようになっていて、万引きでもしようものなら小さな雷に打たれるように細工もしていた。

製作部屋は、錬金術の工房で、部屋の真ん中には、部屋の半分の大きさの鍋が鎮座している。

独り立ちした錬金術師はみんなもっている「錬金術師の鍋」だ。一人ひとり、ちがう模様が鍋肌に刻まれている。

部屋の片面の壁には備え付の本棚があって、錬金術に関する本が隙間なく並んでいる。

私はその本の中から、薬草辞典を引っ張りだしてマルガリータの願

いが叶いそうな効用のあるハーブを探し始めた。

薬草辞典は、結構使い倒しているので、至る所に付箋が貼り付けてある。

最近貼り付けたは、親友のルシードが、契約した精霊が苦手にしてそうなハーブのページだ。みつけて、すぐに教えたら凄く感謝された。あの精霊は、やっぱり相当性格が悪いんじゃないんだろうか。

とりとめのない事を考えながら、辞典のページを繰っていると、店のベルが鳴った。

星降る森の約束 1（後書き）

1 / 29 誤字脱字修正と、文章の修正をしました。

4 / 6 誤字脱字の修正と、ルビを振りました。

星降る森の約束 2

店舗へ出ると、軽装の鎧にマントを羽織った定番の騎士姿をした青年二人組がいた。一人は一般的な茶色い髪の方で、店の商品を物珍しそうにキョロキョロと眺めている。対して、もう一人は、水の民の血が濃いのか見事な銀髪で、じろりと私を睨みつけた。

睨みつけられる覚えがない、初見のお客さんなんですけど……！
「何かご入用ですか？」

私がそれでも愛想良く営業用の笑顔で、客の要望を訊いた。

「ここの薬草で、他の店より二割安いよね？どうして？」

茶色い髪の方が、不思議そうに尋ねた。

雑貨屋を営む上で、重要なのが同業者との付き合いだ。一つの店だけが安ければ、そこにはかり客が集中してしまうので、同じ職業同士集まり相場というものを決めている。いわゆる、商人の組合だ。私の場合は、在庫量が少ない上、一般的でない薬草ばかりを置いている。相場はあつてないような流通量なので、多少安くても相場に影響はでない。

「少量の珍しい薬草を扱っているだけなら相場には影響はありませんから」

「確かに、あんまりみた事ないなあ」

呑気な茶色い髪の方に呆れたように、銀髪の方はため息をついた。
「おい、こういう薬草は扱わないのか？」

銀髪の青年が、懷からガーゼに包んだ薬草を、ひと束取り出した。ガラールクと呼ばれる薬草で、傷薬になるため騎士や、兵士、旅人たちが買っていく。それなりに売れるので、定番商品として置いている店も多い。当然、うちでも扱っている。

「そこに吊るされている束に無かったら、今日の分は終わりですね」
薬草は、乾燥させても効能が続くので、下処理を済ませたら乾燥しやすいように、部屋の柱と柱に渡らせたロープに引っ掛けて吊る

して売っている。

「販売制限するほど、在庫があるのか？」

銀髪の男が、訝しげに訊いてきた。眉根を寄せて、目を細めている顔つきは人を殺せそうなほど、迫力があつた。

この男が危惧するのも分かる。

ガラーワルクは、良い傷薬にはなるがその一方で、使い方を誤れば中毒症状を引き起こす幻覚剤となる。今の国王が、即位したときの最初の勅令はガラーワルクを麻薬として使用する事を禁止するものだった。

警備隊は、勅令を受けてガラーワルクが吸える店や、不当に販売している者たちを摘発しているようだが、根が深く撲滅できていないようだ。

「うちは、森の主から許しを得た量しか売らないと決めていますから」

王立錬金術学院の友人たちと協力して、薬草を育てたり、薬を作ったりしているが、品数を揃えるのには限界がある。森の主に頼んで、森の薬草の余剰分を分けてもらっている。森の主は、森の植物たちと共生しているので、さして貰える薬草の量が多いわけではない。

「ガラーワルクを大量に買っていった奴はいるか？」

「そこまで買っていく人は、いないですよ」

名はそれなりに知られている雑貨屋とはいえ、薬草が大量にほしいのならば、薬問屋で購入したほうが、安上がりなのは誰でも知っている。

「本当か？隠し立てするとならない」

「帳簿があるからわかります。……見ず知らずのあなた方には、見せませんよ」

さも当たり前のように、茶色い髪の男は手を出してきた。それを遮るように、ぴしゃりと私が言くと、二人組の男達は、揃いも揃ってきょとんとした表情になった。

「名乗るの忘れちゃった」

楽しそうに、茶色い髪の男はというと銀髪の男が呆れたようにため息をついた。

銀髪の男は、マントで隠れていた鎧を見せるように、後ろへマントを払った。隠れていた胸元が現れ、左胸に獅子の紋が入った胸あてが見えた。

あ、この紋章は……！

「王都警備隊のユリアだ」

「同じくイスファーン」

二人組は、王都警備隊だった。私に一体何の用事があるのだろうか。悪い事は……してないつもりなんだけど。

茶髪がユリア、銀髪がイスファーンというらしい。

王都警備隊は、王都で起きた事件の調査に二人ひと組であたる。

このふたりは、王都を長年悩ませている麻薬事件の調査を担当しているのだろうか。

つい、三ヶ月前までは、繁華街の表通りに薬の吸引場所があったのだ。取り締まりを強化したので、表立った店はなくなったけど、裏通りにいけばまだまだ簡単に吸うことができる。お店を潰すだけではダメだと警備隊は、気が付いたようで、最近は不正取り引きを抑えて、麻薬を不当に扱っている人たちを一網打尽にしようとしているみたいだ。

麻薬といっても、ガラールワークは昔から傷薬として使われてきたので、まったく使うなと言えないのだ。

「ガラールワーク購入者で、不審な奴を探している。帳簿を見せてもらおうか」

イスファーンが、手を出してきたので、私はカウンターの引き出しにしまっている帳簿を手渡した。売上と仕入を書き出して、人気商品の分析に使っているのだ。

イスファーンは、素早く帳簿自体をくまなく目を通し、帳簿に仕掛けがないことを確認してから、ユリアに渡した。力関係は、イス

ファーンの方がユリアより上かと思ったが、そうではないみたいだ。認識を改める必要があるそうだ。

「帳簿に不審なところは無いみたいだね。みんな、善良な臣民ばかりみたいだ」

ユリアはぱらぱらと、帳簿のページを捲りながら、不審な金の出し入れがないか確認している。

もっとも、私が犯罪に関わるなら表に出す帳簿とはべつの帳簿を用意して二重管理するけど。

「協力ありがと。不審な人物を見かけたら、警備隊に連絡してね」

ユリアは、帳簿を閉じて私に返却すると、まるで小さい子供に言い聞かせるかの様な人の良い笑顔で言った。

見かけたら連絡する、と形通りに答えたら、二人はさっさと店を後にした。あれだけ、時間の拘束をしておいて商品の一つも買わないとは、ケチな役人だ。

二度と来ない様に、清めの砂を店舗の出入り口に蒔こうとしたら、ユリアが意地悪そうな笑顔で、入り口の前に立っていた。

「協力してくれた御礼に、何か買おうと思ったけど、必要ないかな」

ニヤニヤ笑いながら、ユリアは私の手元をみた。私の手には、清めの砂が入った小さな壺が抱えられている。私は、後ろ手に壺を隠して出入り口の脇によけた。

「いらっしやいませ、お客様」

白々しさを、営業用の笑顔で帳消しにしようとするが、ユリアは相変わらずニヤニヤ笑っている。

「したたかな女の子は、結構好きだよ」

ユリアは、店に入って香油を物色した。香油を置いてあるところに貼ってある羊皮紙の広告に、ユリアは目を通していている。香油の完全受注生産の広告だ。注文者の好みに合わせて、油の種類から、香りまで好きなように注文ができる。作るのは、私だったり、共同経営者の友人たちだったりする。

「香油で、自由に香りの注文できるの？」

「私が思いつく匂いであれば何でもできます」

値段は、匂いをつけるための薬草の価値によって変わるので、安いもので三銀貨^{フィッダ}、高いと白金貨^{ブラーティーン}は当たり前だ。

「この香り好きだな。これいくら？」

ユリアが選んだのは、女の子がよくつける甘いお菓子の香りのする香油だ。ハチミツがたっぷり入った焼き菓子の匂いがすると評判の香りだ。

「六銀貨^{フィッダ}です」

ユリアは、懷から銀貨六枚を取り出して私に手渡した。私は、香油の瓶に封を施してユリアにわたした。

「ありがとうございます」

ユリアは、気に入ったら鼻屑にするよと、言って後向きで軽く片手を上げて店から出ていった。

星降る森の約束 2（後書き）

1 / 2 9 誤字修正しました。二話と三話をマージして、ひとつに
しました。

4 / 6 誤字脱字修正しました。 ルビを振り直しました。

星降る森の約束 3

私は、再び工房に戻った。辞典でパラパラとページを捲りながら、薬草の効用を調べていたけれど、恋に効きそうなちょうど良さそうなのは見当たらない。

時刻は、もうすぐ昼。昼食を屋台で食べに行くついでに、花街に商品の納品をしに行くことに決めた。

花街は、高級娼館で知られる「酔角楼」から、最高級の娼婦が使う香水の注文があつた。できが良ければ、鼻屑にしてくれるそうなので、商品作りにも力が入る。

酔角楼の最高級の娼婦は、ローズマリーと言って私は、今まで会った人の中で一二を争う美女だと思う。当然、値段も高い。顧客は、今のところこの国の跡継ぎである第一王子だけらしい。

私は、華やかな街並みである花街の通りを歩き、目当ての楼閣に向かった。

酔角楼は、名前の通り東方の国の文化を取り入れた建物で、華やかな花街にあつても、一際目立つ。赤い瓦屋根が、太陽の日差しに反射して燃える炎のようだ。

最初は、この異様な建物の雰囲気気後れしていた。しかし、慣れたもので、私は楼閣の裏口に回って人を呼ぶ。まだ、店が閉まっているので静まりかえっているが、夜になれば外回廊になっている二階や三階部分から女君達が顔を出し、客引きをしている。昼間のような明るさにするために、たくさんの灯火が置かれ幻想的な雰囲気になる。

私は、夜に納品しにきたことがあるので、無料で中に入ったことが幾度がある。興味本位で、キョロキョロしながら歩いていたら大部屋の様子が覗けて辟易した覚えがある。

大部屋は、大人が二十人ほどが座れる広さで間仕切りでもって客と客の仕切りをし、娼婦が客をとっていた。簡単な間仕切りなので、

隣が何をしているのか声も衣擦れの音も丸聞こえなのである。たくみに服で身体を隠してはいるものの、興にのつてくるとどうでも良くなるのか、半裸状態なのも多い。

あまりの混沌ぶりに絶句していると、案内の男衆にからかわれたのを、覚えている。

中から、まだ起きたばかりの身支度できていない娼婦が出てきた。主に呼ばれてきた事を告げると、部屋に案内すると言われた。ちょうど、娼婦達が起き出した時間みたいで、部屋からでて風呂へ行く者や身支度をしている者、食事をしている者などがいて夜とはちがつた雰囲気、慌ただしい。

案内されたのは、楼閣の主がいる奥の部屋だ。私が来た事を告げると、部屋の中から妖艶な響きの声で入るように言われた。

「こんにちは、女将さん」

私は、部屋の中央にある豪華な刺繍で飾られたクッションに座る女性にあいさつをした。

彼女は、高級娼婦あがりで娼婦宿の経営者にまで登りつめた、ローズウッドだ。薔薇の香りのする木の名前が、源氏名というのが、納得のいく美貌だ。

「いらつしゃい、ネリー。早速商品を見せておくれ」

仕事に徹して余分な話をしない、ローズウッドの姿勢は素敵だ。

私は、向かいのクッションに座って、納品書予定の香水を毛足の長い絨毯のうえに置いた。

ローズウッドは、クッションの上に車座に座り、りんごの薫りをする水パイプを優雅に吸っていた。私にも水パイプを勧めてきたが、丁寧に断わった。水パイプは、匂いは平気だが味は好きではない。

ローズウッドは、ただ座ってパイプをくゆらせているだけだが、非常に絵になる。

「名前に相応しく、薔薇の香りのする香水をもってきました」

最高級娼婦のローズマリーの名前の由来の花は、一般的には樟脳のような深い木の匂いがする。品種によっては、薔薇の香りのする

種類があるという。薔薇の香りは、美人を想像させるし、花街一番の売れっ子なら、花の女王である薔薇こそが相応しいと思って調べた。

ローズウッドが、香水の蓋を開けると甘い薔薇の匂いがした。濃い薔薇の匂いではなく、美しい一本の薔薇が香っている匂いだ。

「いい香りね」

掴みは上々みたいだ。

「最初は、薔薇と少量のオレンジの匂いがします。つぎは、薔薇だけの甘い匂い。最後には、やさしい木の匂いに変わります」

ローズウッドは、香りを直接瓶から嗅ぐのではなく、瓶の口を手で煽って香つてを確かめている。

「いい匂いね。言い値で買わせていただくわ。これからも、私の注文をきいてくれるかしら？」

どうやら、ローズウッドのお気にめしたようだ。

「はい、叶えられる限りでしたら」

私の返答にも満足したようで、口の端をあげてニンマリとローズウッドは、わらった。

「面白いのが、できたらもって来ると良い」

私は、ローズウッドの提案に礼を述べて楼閣を辞去した。お得意様がまたひとつ増えたことは、嬉しいことだ。

市場^{マーケット}まで戻り夕食の食材を買うことにした。屋台ばかりが集まっている通りに出ると、なにやら人だかりができています。

市場^{マーケット}では、珍しいことではないけれどなんだか様子がおかしい。どうやら、厄介ごとを遠くから眺めみている野次馬のようだ。

事件に巻き込まれるのはゴメンだったので、私は、さらにそれを遠巻きに通り過ぎようとした。

突然、野次馬のみつめる中心から、聞いたことのある声がした。

「ネリー、ようやく見つけた」

野次馬が、私を中心にして左右対称に道を開いた。

「家に行っても留守だから、困っていた」

屋台の客として優雅に椅子に座っていたのは、私の母だった。

星降る森の約束 3（後書き）

1 / 2 9 誤字脱字の修正と、二話分をマージしてひとつ分の話に
しました。

4 / 1 2 誤字脱字修正しました

星降る森の約束 4

誰にだって苦手な人というのはいるものだ。学校の苦手な科目の先生だったり、意地悪な近所の男の子だったり。

私の場合は、親不孝な事に実の母親が一番苦手だ。

母は、宮廷筆頭魔術師である。父も宮廷魔術師だ。父がいり婿なので、母親の姓を名乗っているのだから、このプチグレンという名は代々宮廷魔術師を排出する優秀な一族なのだ。

建国の英雄である六貴族より家格は下がるが、広い領地を治める上級貴族に数えられる一門だ。

そんな、映えある一族の直系であるにもかかわらず、私は、魔力が全く無かった。兄も、姉も、弟も、妹も魔力を持っていて、しかも強力だった。兄と姉はすでに宮廷魔術師になっている。兄はそのまま王宮に勤めていて、姉は地方都市の常設部隊として赴任している。弟と妹は、王立魔術師学院に通学していて、優秀な成績だという。

私かというと、魔力が無かったので王立魔術師学院には入学できないばかりか、魔法が使えないのが珍しいのか兄弟たちの魔法の的当てがわりにされた。

母は、それを見ても辞めると兄弟を止めなかったし、むしろ何故、避けたり魔法を使わないのか仕切りに不思議がっていた。

私は、叔父に助けられるまでこれが当たり前前のことと、どの家庭でも魔力がない人間は的当てにしかねないのだと思っていた。

苦手意識を持ち始めたのは、いつからだっただろうか。兄弟たちは、ものごころ着く頃から嫌いで、苦手だったが、兄弟達よりも数倍も強い魔法をいとも簡単に使う母を見てから、苦手になったかもしれない。

家を出てからは、兄弟たちが成長して魔術が強力になったので、生命の危険も感じた。だから、なるべく実家には近づかないように

していたのに、何故か今頃、母親が会いに来ていた。

「学院入学以来ですね。お母様」

「貴女に直接会うのはそうなるわね。遅くなっただけ、卒業を祝いに来たの」

相変わらず、母は宮廷魔術師の仕事で国中を飛び回っているようだ。

「ここでは、目立ちますから家に行きましょう」

私は以前、叔父が住んでいた家を借りている。叔父が錬金術師だったおかげで借りている家も、錬金術を行うのに便利な環境になっている。

もう一つ、母を苦手な理由。それは、母が飛び切りの美人ということだ。もう、四十代だろうにしみ、しわなど見たことがない。三十代、下手したら二十代でも充分通じる。豪華な黄金の系のような髪に、よく晴れた空の色をした瞳。薔薇色の唇はぼつりとしていて、色つばい。

父が、激しい競争に勝って結婚したというのも頷ける。

私の顔立ちは、はつきり言って、両親どちらとも似てなかった。

どちらかにでも似ていれば、普通以上の容姿の持ち主になれたのに、ついていない。

母を私の家に案内すると、母は玄関の前で立ち止まって私の住处を見上げた。

「やっぱり帰って来なさいよ、ネリー。我が家でも錬金術はできるわ」

実家で、錬金術をするとなったら単なる道楽だ。お金に不自由しないので、どんな実験もできる。でも、それは私が本当にやりたい事とは違う。

私は、自分の錬金術で困っている人により良い商品を提供したいのだ。錬金術で、なにを作ってもいいというのは、私の向う方向と違う。

「水汲みだって、掃除だってしなくていいのよ」

王都では、上下水道が完備されていて、共用の水道で水汲みをする。共用の水道は、井戸よりも個数を多く作れるので、比較的民家の近くに水道があることが多い。だから、そんなに苦はないのだが、貴族の娘はやらない事だろう。

「何度言われても答えは一緒だよ。私は、この生活が好きなの」

この生活が好きだから水汲みも、部屋の掃除も苦にならないのだ。私は、貴族の生活はできそうに無い。

「他の子たちだって、大人になったのだから、貴女を魔法の標的にしたりしないわ」

兄と姉は、確かに標的にしないと思う。しかし、この間、偶然、弟と道端で会ってしまった。

普通、貴族の息子は馬車で移動するものである。だから、同じ王都に住んでいても、すれ違う事は無いと言えた。だが、その日に限って弟は、馬車ではなく、徒歩で王都を闊歩していた。王立魔術学院も王都にあるのだ。恐らく、学院帰りなのだろう。私をみるなり、魔術を掛けてきた。呪文も、予備動作無しで発動するものを、選んでいる。

私も、錬金術学院で学問を納めた身だ。不意打ちをしてくる魔術師に対する対処ぐらいしている。魔法が私にぶつかる寸前、弾ける音と同時に、迫り来る炎が掻き消えた。

私は用心のために、錬金術で造った指輪をしている。低級の魔術なら、一定距離まで近づくと、自動的に掻き消すのだ。

弟は、意外だったのか驚いた顔をして、私を見返した。直ぐに、魔法の杖を取り出して、呪文を唱える予備動作をし始める。

ここは、王都の大通りだ。人もたくさん行き来している。そんな中で、予備動作が必要な、強力な魔術を使おうとするなんて、頭がどうかしている。

私は、弟が呪文詠唱に夢中になっているうちに、懐から道具を取り出した。錬金術が施された石で、投げるだけで使える。咄嗟の対処にとっても便利だ。

対魔術師用に鍊金術を施した石を、弟目掛けて投げつけた。流石に、弟は詠唱したまま、石を杖で叩き落としていた。

馬鹿め、掛かった！

悪役のような台詞を心で呟いて、私は弟の脇を全力で駆け抜けた。弟は、そのまま魔法を私に使おうと手を振り上げる。

しかし、手からは何も出ない。おたおたと弟がしている間に私は、見事に逃げおおせたのだった。

あの投げつけた石が、魔術封じの鍊金術が込められていたから逃げ切れたのだ。

弟は、全力で私を殺そうと思っているに違いない。

こんな状態で家に帰ったら、間違いなく魔法の標的だ。

「なんと言われても帰りません」

お互いの主張が、平行線になったところで、店舗に置いてある呼鈴が鳴った。

お客さんが、来たようだ。

私は、母にその場にいるように頼んで、店舗へと足を運んだ。

お客さんかと思って愛想よく出れば、店にいたのは、ユリアとイスファーンの警備隊二人組だった。

「何か用？」

私が二人に尋ねると、ユリアがふところから薬包を数個とりだした。どれも同じような白い粉末で、匙一杯ほどの量が包まれている。テーブルに見やすいように薬包を並べると、ユリアは言った。

「この成分を調べて欲しいんだ」

「王都警備隊には、専門家がいるでしょ」

「いるには、いるけど……たまには、外に依頼するのもいいかなって」

人がよさそうな笑顔を浮かべながらユリアは言った。

なんだか、話が胡散臭い。こういう事件性のある品物の鑑定は、警備隊お抱えの専門薬師が行う。事件の立件に有利だからだ。それをあえてやらない理由は、限られてくる。

専門家でも分からない特殊な薬品か、それとも薬師もしくは、その周囲が内通している可能性があるからだ。

少なくともユリアは、そんな大きな事件に、関わりそうには見えないのだけれど。

人は、見かけによらないのかしら？

「なんだか分からないものを分析するのは、すごい時間がかかるけど」

「ガラーワルク、だと思われるものかな？精製濃度まで調べてくれる？」

ユリアの言い方は、疑問系になっているが、有無を言わさない口調だ。

厄介な事件の始まりじゃなければいいけど。

私が返事を返そうとしていたら、店舗と住居を繋ぐ扉が開いた。

母が、私の名前を呼んだ。

「喉が乾いたの。お茶を入れてくださる？」

母は、私が接客中なのをまるで気にしていない。

「お客様が、帰られたらね」

私の言葉に、ようやく接客中である事に気がついたのか、母はユリアとイスファーンを見てにつこりと、愛想笑いをした。

「どちらが、ネリーのお相手なの？」

何がおかしいのか、くすくすと笑ながら母は、言った。

「なんだか、イスファーンの顔色が青い。」

「ただの仕事仲間です。余計な勘ぐりは失礼でしょう」

ユリアは、おっとりとしているが王都警備隊なのだ。難しくつけて、城の牢屋にぶち込む事だってできるのだ。隙を見せてはいけない。

「あら、そうなの？二人とも良い男だからどちらでも構わないのよ？」

母は、相変わらずあまり人の話を聞いてないようだ。

「ちゃんと彼氏ができたら知らせますから。とりあえず、奥の部屋

で待って下さい。お茶もすぐに入れますから」

なんとか母を奥の部屋に帰した。一部始終を見ていたユリアとイスファーンは、なんとも言えない微妙な表情をしていた。

どこか、哀れんでいるというか……。

「あの方は、君の母君？」

ユリアは、母の去って行った方を向いて言った。

「似てないでしょう？」

渡しの遠回しの回答に、ユリアは首を横に振る。

「よく似ている。私たちに親しそうにしながら、目が笑っていないところだ」

ユリアの代わりにイスファーンが、私と母の似ているところを答えた。ユリアが違うと言わないところを見ると、同じような事を思ったのだろう。

「それは親子の特徴とは言わないわ」

「そうかな？ 笑ってない目なんで、すつごくそっくりだよ」

ユリアが太鼓判を押したが、喜んで良いのか。

「ガラーワルクかどうか、精製濃度については分かったら知らせるわ。どうせ、成分表を書いた書類が必要なんですよ？」

「話が早くて助かるよ。報酬もそれなりに支払うから」

それなり、というのが曖昧すぎる。妥当な報酬を払ってくれない場合があるし。

「不満そうだな」

イスファーンが、言った。

「ちゃんと報酬額が知りたい」

「金貨十枚十ダハフ払ったら、今日中に全部調べられる？」

「馬鹿な事言わないでよ。濃度調べるのは、時間がかかるの」

私は、以前の仕事でどの位かかったのか思い出して、目安にした。

「早くて三日。確実なのは一週間とどこかしら？」

「一週間なら、銀貨五枚五フィッター。三日なら金貨三枚だ三ダハフ」

私はその契約で良いと頷くと、ユリアも満足そうに笑った。

星降る森の約束 4（後書き）

1 / 2 9 誤字脱字の修正、二話分をひとつにしました
4 / 1 2 誤字脱字の修正、文章の修正をしました

星降る森の約束 5

ガラーワルクらしき白い粉の入った薬包の分析は、後で行うことにした。店に並べる商品を、エルフが住む「暁の森」へ取りに行く時間が迫っている。

錬金術の雑貨屋といっても、いつもお客さんがいる訳ではなくて午後の昼下がりの時間は、みんな昼寝でもしているのか客足が遠のく。

城壁の外にある暁の森へ行くのにはちょうどよかった。

砂漠の国というと、他の国からやってきた人は、砂で囲まれた不毛の土地で全て覆われていて、点在するオアシスに人びとが固まって住んでいると思われることが多い。

国土の四割は、確かに砂で覆われているが残りは荒野と豊かな森である。王都のフェンネルは荒野に囲まれているものの肥沃な土地らしく、平原とエルフの住む暁の森があった。

エルフは、人よりも少し尖った耳を持つ種族で長身痩躯であることが多い。人よりも長生きで、森で生活しているが、閉鎖的に人を中に入れたがらない。

唯一の例外は、エルフと交わす「血の盟約」と言われる契約を結ぶことだ。エルフに認められれば、世界で一番美しいと言われるエルフの都にも足を踏み入れることができた。

血の盟約を結ぶ条件はよくわからない。エルフが人間の人柄をみて善であると認めたものしか契約しないと、声高らかに主張する人間もいる。

私も血の盟約を交わした一人だが、あれは多分にエルフの好みで決めているようにしか見えない。彼らだって、完璧ではなくて、充分に気分屋なのだから。

母を家において行こうかとも考えたが、そんな事したら家がどうなるかわからない。母は、血の盟約者ではないので、契約しなく

ても入れる場所まで連れて行く事にした。

外敵の侵入を防ぐ高い城壁の外側に暁の森はある。城門から外に
でて、王の道沿いに少し歩くと豊かな森が目の前に現れる。この森
すべてが暁の森であるが、エルフたちの居住区は森の最深部だ。外
側は人間との共存のために、誰でも入れるようになっていて、

森に一歩足を踏み入れると、少しだけ涼しく感じた。焼けるような
日差しが、木の葉で和らぐのだ。

私の契約したエルフは、ゼラと言ってみた目は十歳ぐらいの少年
である。私と初めてあったのは十一年前で、その時から姿が変わっ
ていない。

エルフは、人間とは異なった時間が流れている種族だからだ。

ゼラに連絡をしてこの場所まで来てもらう必要がある。エルフは、
人には聞こえない声が聞こえるようで、木や草と会話ができるのだ
という。

私からの一方的な通信手段は、草に話しかけて伝言ゲームのよう
に風に乗せて伝える事だ。

「森の住人、ゼラに伝える。境界までしか行けないから、こちらに
来て欲しい」

手近な草に話しかけた。はっきり言って不審な行為だが仕方がな
い。

風まかせというのが、不安だがそう待たないうちにゼラは、来る
だろう。

さすがの母も、暁の森では大人しくしている。

大木の根元に母と並んで腰を降ろして、ゼラが来るのを待った。
やがて、幾つかの荷物を抱えてこがらな少年が優雅な足取りでや
ってきた。エルフという種族は、ただ歩くだけでも優雅で様になり、
よく絵画の題材になる。

ゼラにもその事が言えて、美しい顔立ちは繊細な美少女と言って

も良いぐらいだ。ただし、剣の腕はたしかなので筋肉質気味の美少女ということになってしまうが。

「ネリー、会いたかったよ」

両手に抱えている荷物を放り投げて、私にぎゅっと抱きついてきた。ゼラと私は、同じ身長なので下手をすると頭をぶつける。それでも、ゼラは抱きつくのをやめない。

ゼラが放り投げた荷物はうちの店の商品として、店頭に並ぶ予定なのに。

私は溜息をついて、弟みたいなエルフを抱き返した。

ぎゅうぎゅう抱きついてきたゼラは、満足したのか私から離れると放り出した荷物を拾った。

妙な視線を感じて母を見ると、にやにやとなんだか良くない笑みを浮かべていた。

「なるほどね、こういう人がいるならあの二人には見向きもしないわね」

母は、私をちょっとからかうつもりなのだろう。その手の冗談が通じないエルフがここにいることを知らないからだ。

ゼラは、満面の笑みだった顔をさっと変えて不機嫌そうに母を見た。

「それはどういうこと？」

「美丈夫二人組からの仕事の依頼にも、ネリーが動じていなかったから」

エルフから話し掛けられているというのに、母は全く臆することなく発言した。

本当にこういうのは、度胸がある。

「美丈夫二人組？」

ゼラの機嫌がますます傾く。呼応するかのようには、暁の森の木々が不安そうに葉を揺らしてざわめく。

暁の森は、ゼラの機嫌に反応するのだ。

「たんなる仕事の依頼人よ。王都警備隊の人」

これ以上、ゼラの機嫌が傾いたら何が起きるか分からないので、私は感情を込めずに事務的に答えた。

ゼラは、訝しげに私の瞳を覗き込んだ。真実を見通そうともいうのだろうか。

気が済んだのか、ゼラはにつこりと笑って母に向き直った。

「ようこそ、ラカシス。久しぶり？」

ゼラは何でもないかのように母の名前を呼んだ。宮廷魔術師である母のことをゼラは知っているようだ。

「二十年ぶりぐらい？ 決戦に出る前に会ったのが最後ね」

二十年前、魔王が復活し王国が滅びかけたことがあった。その頃から宮廷魔術師であった母が魔王との戦いに参加したことは何となく知っていた。

ゼラも当然、その戦いに参加していた。知り合いであってもおかしくはない。

「母である君にも言うておくよ。ネリーは、僕のものだ」

エルフは、実直で誠実だ。恥ずかしげもなく、ゼラは私の肩に手を置いて宣言した。

「ネリーが良いなら、好きなようにするといいわ」

母にしては、珍しくまともなことを言う。

「ネリーは、僕が良いよね？」

ゼラは、問うように尋ねているがどう聞いても決定事項にか聞こえない。

私は、この長く生きて、見た目通りの精神年齢にしか見えないエルフとの関係に、答えを出せないでいた。

私は人間なので、歳をとり大人になる。しかし、エルフは人間と時の進みが違うので、私が大人になっても、ゼラだけは少年のままであることもありえる。

見た目の差は今には気にならないが、差が大きくなったとき、私はちゃんとゼラを見れるか確信はない。

私が、なんとか答えをごまかそうと口を開いたら、母が誰何

を問う厳しい声を上げた。

木の影から、地面に倒れこむ様にでてきたのは、見なりがボロボロの青年だった。

星降る森の約束 5（後書き）

誤字脱字の修正、二話分をひとつにまとめました
4 / 1 3 誤字脱字の修正、ルビに対応しました。

身なりはボロボロで、意識も酩酊しているのか足取りが覚束ない青年が、木かげから転がりでて来た。

咄嗟にゼラは私の前に飛び出て庇うように立ちはだかった。母は、落ち着いたもので何事もなかったかのように静かに立っている。その実、予備動作なしで使える魔法が待機しているのは母の、真剣な顔立ちから推察できた。

ゼラは、足を縛れさせ地面に倒れ伏した青年にゆっくりと近づいて行った。腰に下げている剣に左手を添えている。

近づいてもぴくりとも動かないのを確認してからゼラは膝を地面について青年の様子を伺った。

薄く腹が上下しているの、生きていることは分かる。

「気を失っているだけみたいだ」

青年の状態が確認できて、なにか身元が分かるものを探そうと三人で青年の懷を漁った。

でてきたのは、空になった薬包と何枚かのコインだけだ。身分を証明するものはなにもない。貴族だったりすれば、家紋の指輪をしている事もあるが、装飾品の類は見当たらなかった。

青年の服装は、大規模な商家の出か、貴族の出かといった具合の高級な材質で作られた服で、一般臣民が古着を着用していることを考えれば、十分に裕福な生活環境にあると言える。

高級な服が、ボロボロになるほどの出来事があつて、ここまでやつてきたようだ。

「この薬包は麻薬が入っていたみたいね」

母が包に残っている白い粉を躊躇なく指先につけ、ひと舐めした。そんな事、危ないから普通やらない。母は怖いもの知らずのようだ。

「麻薬中毒者が増えていると聞いたけど、中毒者の層は大分広そう

ね」

「この人をこのままにしておけないわ」

見たところ耳も尖っていないので、人間だろう。

生憎と、私は麻薬中毒患者の応急処置は、心得ていない。

王都警備隊の詰所に連れて行けば、誰かが適切な手当をしてくれるだろうし、家族が探している場合はすぐに対処してくれる。

私はゼラに頼んで二人で、青年を詰所まで運ぶ事にした。

王都警備隊の詰所に来たが、ユリアとイスファーンは巡察中で留守のようだ。応対した警備隊員に、暁の森の入り口で発見したことを伝える。

すぐに医者が呼ばれ、手当をするそうだ。発見者の身元が知りたというので私の名前と住まいを告げた。

母は、アレでも有名人なので必要位上に名乗りたがらないし、ゼラは暁の森のエルフなのでうかうかと、契約していない人が、訪ねに行くことはできない。

母が名乗らないのを警備隊員は不審そうに見ていた。見逃してくれないあたり、優秀だけど融通がきかない。

母は、仕方がなく名乗った。尋ねた警備隊員だけでなく、私たちのやり取りを、なんとなく聞いていた他の隊員たちも驚いて、こちらを一斉に注視した。

「ラ、ラカシス・プチグレンで、あの百の迷宮から行きて帰って来た？」

「魔王殺しのラカシス？！」

警備隊の詰所がざわめきに包まれる。

母は、優秀な魔術師で天才的な魔術の使い手だ。二十年前の魔王侵攻の時に、魔王の住処である百の迷宮に挑み生きて帰って来た英雄の一人だ。

母は、生ける英雄で名声を欲しいままにしている。他の英雄たちが、それぞれ僻地で隠遁生活をしている中、ただ一人宮廷の第一線で活躍中している。

何時だったか、何故隠遁生活をしないのか、誰かが母に尋ねたことがあった。母は、一瞬だけ寂しそうに笑って「約束だから」とだけ言った。

何の約束なのかも、誰との約束なのかも決して答えなかった。小さい頃、母が英雄の一人であることを知って、ベツヘルム人なら誰でも知っている、魔王軍との戦いのことを私は、聞いたことがある。

何度尋ねても答えは同じで「多くの犠牲を払い魔王に勝った」の一言だけだ。いつしか、私も聞かなくなった。

「宮廷筆頭魔術師のラカシスです。身元は充分ね？」

警備隊員からの尊敬と憧れの眼差しに晒されながらも、動ずることなく、むしろ煩わしそうに、母は念を押した。

母を引き留めたような警備隊員たちの強烈な視線を感じながら、私たちは詰所を後にした。

ゼラは、結局私の家まで荷物を持ってくれた。中身は、森で採取した薬草やエルフお手製の軟骨だったりするのでそんなに重くないのだが、男の子ぶりたいのか、そういうことを積極的にしてくれる。さきほど王都警備隊の詰所に連れて行った若者は、どうみてもガラールルクの中毒症状を引き起こしていた。

あれが、ユリアの言っていた「王都で流行っている麻薬中毒者」というやつだろう。身なりの様子から、元は、身分の高い人物像が薬に溺れて堕ちていったと考えた方がいいかもしれない。

私は、ユリアから渡されたガラールルクの濃度を調べることにした。

実験器具を取り出して、もらったガラールルクを蒸留水に溶かし試薬をスポイトで数滴垂らし入れる。時間がたたないと水溶液の結果はわからない。私は、ふと、母が静かにしているので気になって生活に使っている部屋まで戻った。

母は、書棚から錬金術の本を取り出して読んでいた。

窓の外を見ると、夕やけ色に染まっている。あれからだいぶ集中

して行なっていたようだ。そろそろ夕食の時間だ。例によって、屋台に買いに行く。

夕食を買いに行くついでに、友人のルシードの様子を見に行こうと思った。両親が突然に亡くなってから、無理をするように笑っている顔しかみていない。

好きな錬金術に打ち込めば、だいぶ楽になるかもと勧めてみたけれどルシードは自分の事にいっぱい聞いてなかったかもしれない。ルシードに会うのは良いのだが、契約したあの精霊に会うのは怖い。ルシードは、まったく気になっていないようだが、あの精霊は良くない。たちの悪い精霊で、しかもものすごく強力だ。

^{ナジウム}星の名前が意味する精霊なんて一つしか無いというのに、ルシードは、何を名前が指しているのか知らないようだ。

だからと言って、私の口からは言えない。

私は、母に断りをいれて留守番を頼むと、ルシードの様子と夕食を買いに出かけた。

あの母を留守番させるのは気後れたが、本に集中しているようなので騒ぎになることはないだろう。

ルシードの家は、私の店から通りを二本ほど挟んだ貴族の住む区域にある。

玄関の呼鈴を鳴らそうと手を伸ばすと、中から賑やかな声があった。相変わらずルシードとその精霊とは仲が良いのか悪いのかよく分からない関係のようだ。

「あ、ネリー、いらっしやい」

中から扉を開けてくれたのはルシードだ。

前よりは明るい顔色に、まずはひと安心だ。

いつもの様に、居間に移動してルシードがお茶をいれてくれる。

精霊のナジウムもルシードから、付かず離れずの距離でいた。

ルシードに、最近の様子を聞いてみると両親の遺品の整理をしながら職を探しているらしい。

「あのさ……良かったら、私と一緒にお店やらない？」

私は、遠慮がちに尋ねた。ルシーダの錬金術の腕は折り紙付きだ。就職先だって困らないはずである。わざわざ、新規立ち上げのお店に勤めなくてももっと良い場所を選べるはずだ。

ルシーダは、きょんとした表情を浮かべていいの？と、小さい声で聞き返した。

私がお店を開いたのがそんなに意外なのかな？

学院を卒業したら、絶対にお店を開くと決めていたのに。

「うん、人手がほしいところだったし。ルシーダなら、錬金術の腕前は保証されてるし」

もともと、学院の仲間たちが集まって開いたお店だ。

まだまだ学生気分が抜けなくて大変な事もいろいろあるけれど、なんとか軌道に乗ってきている。

それもこれも、卒業前に試験に受ければ開業してもいいと、理事長の許可をもらえた事にある。

おかげで、試験終了直後から仲間たちと開店にむけて奔走していた。

ルシーダは、学院卒業後、錬金術師として生計を立てないと言っていたので、その仲間には入っていなかった。

「ネリーは、どんな商品売り物にしてるの？」

少し考えたあと、ルシーダがお店に興味を示してくれたみたいで、詳しく話を聞きたがった。

基本的には、薬剤を中心とした錬金術の商品を売っている。ただ、小さな店なので頼まれればなんでも作る。

意外と好評なのは、匂い付きの石鹸だ。

仲間たちとは共同出資で、自分たちで作った商品を店頭に並べる。経営方針は、私ともう一人の仲間で考えている。だけれど、小さい店だから、作りたいものを売ることもしているので、ある程度は自由になっている。

もちろん、商品の納付以外にも錬金術に必要な水溶液を、大量に

作ってくればコストダウンになるので、より利潤が望める。

手探りのところが多いけれども、自分たちで作れるものは、できるだけ作った方が利潤が良い事はわかり始めた。

ルシーダは、嬉しそうな表情で私たちのお店の話を聞いていた。

錬金術の学院は卒業に漕ぎ着けるのが難しいことをあまり世間に知られていない。授業が厳しくて、ついていけなくなって辞める人も多いのだ。

その中で、卒業するのは、本当に錬金術が好きな錬金術バカばかりと言う事になる。だから錬金術の話は、聞くのも話すのも好きという人種が多い。

とりあえず、お店に来てくれる様に頼むと、ルシーダは何度も頷いてくれた。

「ね、あの……精霊とはうまくいつてる？」

席を外しているあの精霊について、私は聞いた。

こんな機会でもなければ尋ねることすらできない。一人前の錬金術師になるには、錬金術の手助けとなる精霊を契約する必要がある。私も精霊と契約している。私が契約したのは、炎の下級精霊で小さなろっそくのような炎の姿をしていて、普段は錬金術のランプに住んでいる。

しかし、ルシーダは違う。普通の錬金術師は契約できない上級の、とびきり上級の人型をした精霊と契約できてしまったのだ。しかも、ご丁寧な「星^{ナジウム}」という名前を精霊が名乗ったらしい。

私が薄々、ナジウムの性質について気がついていいるせいか、あの精霊は私をよく睨みつけている。

目線で人が殺せそうなほどだ。

「うまくいうか、ムカツいたり、どついたりしたくなるけど物凄く困ったことにはなっていないよ？」

お気楽な答えがルシーダから返ってきた。

ルシーダはあの精霊の力の強さに、脅威を感じてはいないみたいだ。

鈍感なのだろうか。

あの精霊に対して、隣に住む困った青年のような評価を私は期待していたわけでは無いのだが。

「そう、ならいいの。ルシーダは気がついてないみたいだけど……あの精霊は、普通じゃないから」

一応、忠告を試してみる。

「普通じゃないのは判る気がする。性格がひん曲がってるし、信じられないぐらい上から目線だし」

そう言う風にルシーダが、理解してるならいいのかな。

精霊については、心配する必要はなさそうだ。

「あ……うん、そういう理解してるんだ。ルシーダが危険じゃなければ、いいの」

ルシーダも、なんとか大丈夫そうだし夕食後買って帰るかな。

星降る森の約束 6（後書き）

1 / 2 9 誤字脱字修正、二話分をひとつにしました

4 / 1 3 誤字脱字の修正、ルビに対応しました。

星降る森の約束 7

いつものように屋台で、夕食を買って帰る。違うのは、母がいることだ。二人分買って帰ると、実験の結果が出ていた。

頼まれたあのガラーワルクと思われる粉は、濃度の濃い精製されたガラーワルクで、錬金術師もあまり使わない濃度だ。傷の薬として販売するときに不便だからだ。普通、そこまで濃くなるほど精製しない。

明らかに人為的に濃度をあげたもののようだ。

ここからどの位の不純物が混じっているのか調べて纏める必要がある。

ここから先調べるのは、長くなりそうなので先に母と夕食を摂った。

あくる日、まるで狙っていたかのようにユリヤとイスファーンがやって来た。

結果がでたら、警備隊に知らせにいくと言ったのに待てないほどせっかちのようだ。

「途中経過を聞きに来ただけだ」

「濃度が濃いとしかいいようがないわ」

それでも優先的に調べているのだが時間のかかる試験だつてあるのだ。

「どの位濃いのか？」

「詳しくはまだ。私見でいいなら」

私は食い下がってくるユリヤに、代替え案をだした。
ユリヤは頷いた。

「錬金術師なら、こんな濃い扱いに困るから作らないと思うわ」

「学院首席卒業生がいうなら、他の錬金術師もおなじだろうね」

まっとうに使おうと考える人ならこんなことはしない。濃度を濃くして、麻薬として儲けようとするなら、やろうとする錬金術師も

いるだろう。

麻薬の怖さについても勉強するので、自分が使うには怖いし他人に使わせるにしても良心の呵責に耐えられないと思うのだから、世の中そんな人ばかりでは無いのだろう。

ユリヤは、何か考えたあと人の良さそうな笑顔をみせた。なにかよからぬことを考えていそうだ。

「頼みがあるんだけど」

「お断りします」

「あ、聞いてくれる？素直で嬉しいなあ。麻薬販売の錬金術師として冤罪着せられるよりいいもんね？」

こ、こいつ……！

私が次に断ったら本当に、麻薬販売の錬金術師として捕まえる気なんだ。

麻薬販売は死刑だよ？

無実の人を死刑にして、良心が咎めないのか知りたいものだ。

「できる限りよ。無茶はできないわよ」

「ちよつと潜入捜査してよ」

なんてことないようにユリヤは言った。

え？潜入捜査？

ちよつとどころじゃないと思うんですけどーっ

空いた口が塞がらないとはこのことだ。

「あの君たちが拾った男はね、ちよつとばかり身分の高い男だったんだ。貴族たちの、間で麻薬吸引がオシャレとか言って流行ってるみたいなんだ」

馬鹿だよねつとユリヤは笑った。私は笑えない。

凄い嫌な感じがする。

「でね、今度貴族の若君たちが宴をやるみたいなんだ。女の子を呼ぶっていったからさ」

ほら、嫌な予感があたりそうだ。

「娼婦の振りして内部偵察してきて？」

ほら、きた！

「そういうのって、警備隊の情報を扱う人達がやるんじゃないの？ 素人なんか当てにしないでよ」

「もちろんやるけど」

内部まではなかなか人材がいらないんだよね、とユリヤが囁く。

「何も、危ないことをしろとは言わない。宴に参加して様子をみてくればいいんだ」

イスファーンが口添えのつもりか、以下にも簡単なことだと言わんばかりに言い放つ。

「それとも、お前は様子を見る事もできない馬鹿か？」

イスファーンの挑発だと分かっている私も私は、売られた喧嘩を買った。

「そこまでいうなら、やってみせるわ」

「そう言ってくれると思ってたよ。報酬はそれなりに弾むからね」

ユリヤはニコニコしながら、気前良く金貨五枚をカウンターの上に置いた。

「宴にでる支度金。貴族の集まりだからそれなりに身支度しておいて」

詳しいことは、後日伝えるよとユリヤは言っただけでイスファーンと二人、慌ただしく帰って行った。

挑発に乗っちゃうとか、私、本当に馬鹿かもしれない。

潜入捜査の手口だって、高級娼婦の振りというだけでそういうこととの伝手さえ教えてくれないのだ。

花街の伝手は、酔角楼の女主人であるローズウッドしかない。彼女に貴族の宴とやらに入り込めるか尋ねるしかない。

酔角楼なら、貴族たちから声がかかり城へ上がることもあるだろうが、好みもあるから同格の別の娼婦宿が一手に引き受けてるかもしれない。

なにかしらおみやげ持参で行かないと、願い事は聞いてくれないのだろう。

「城へ上がるの?」

しっかりと、ユリヤとのやりとりを聞いていた母が私に尋ねた。

「引き受けたし」

「いつ?」

私は、ユリヤに教えてもらった日を伝える。ちょうど、一週間後だ。

母は、なぜか酷く驚いていた。

「危なくなったら、宮廷魔術師のパルサティラの名前を出しなさい」

「お母さまの名前ではなく?」

「その貴族の宴が開催する日は、宮廷で重要な祭典があるの。私は、中で祭典に出席しているけれど、パルサティラは警備担当してるわ」
貴族の宴で何をしてるか分からないが、宮廷の祭典を隠れ蓑に良くないことをしてるのだろう。

警備は、祭典の方に人が割かれるはずだ。

「それと……」

母は、何か言おうとして口籠ると遠くを見てから私に視線を向けた。

「自分で真実を見つけなさい。見たことが全てではないのよ」

はつきりとものを言う母にしては、珍しく象徴的なことを言った。
「そろそろ帰るわね。体に気をつけて、たまには家に帰ってきなさい」

やってきたのも突然なら、帰るのも突然だった。母は、さっさと荷物をまとめて出て行った。私の「実家に帰る」と言う返事をしなかったのを確認しないで。

ローズウッドへの貢物として私は薔薇の香りのお香にしようと思った。良くあるお香は、神事に使うことが多いので乳香の匂いが強い。

部屋にいい香りがすれば、客も長く居たくなるだろうし、他の店との違いも出せる。

催淫効果があるといわれている麝香の香りと薔薇の匂いを混ぜて

見たらどうだろう？

薔薇の香りは揮発性が高いので、お香を焚き始めたばかりの頃によく香り、お香が小さくなってきたら揮発性の低い麝香の香りへと移る。中間が薔薇だけというのもつまらないので、他の花の匂いを混ぜてもいいかもしれない。

私は乳鉢に乳香の破片と、薔薇の香りを移した油を少しいれて乳棒で擦り始めた。幾つかの花と、木の香りの破片を入れて最後に蜂蜜を少量入れればお香の元ができる。形に詰めて乾燥させれば出来上がりだ。私は、円錐形の形に押し固めて錬金術で早く乾燥させる出来上がったばかりのお香を、香炉に置いて火をつけて燻らした。

星降る森の約束 7 (後書き)

1 / 29 誤字を修正しました

星降る森の約束

出来上がったお香を持って、ローズマリーが主である「酔楼亭」に向かった。このお香と引き換えに、一週間後に行われる貴族の子息が集まる宴に潜入させてもらおうと思う。

ローズマリーの所は有名だし、美人揃いだから呼びがかかっている事だろう。

私は、そのお手伝いさんという名義で着いて行きたいのだ。

いつものように、ローズマリーの執務室に通された。ローズマリーは、仕事をしていたようで、机の上に広げられた羊皮紙を仕舞いながら私に話を促した。

「お香を作ってきたの。オリジナルで非売品よ」

私は用意してくれた香炉に入っている灰を整えた。次に炭を起こす。紅く燃える炭を灰のなかに埋めた。灰の山の上から先ほど埋めた炭まで細い棒を突き刺して空気穴をつくる。その穴の上に、小指の先ほどの網を乗せて、その上に香を置いた。

やがて、じんわりと薔薇の香りが部屋に広がる。

ローズマリーは、面白そうにニンマリと笑って香炉を手に取り、そつと手で仰いで間接的に香りを嗅ぐ。

「なかなか、良い出来の香だね」

薔薇の匂いの中に、微かに柑橘系の匂いがして甘いだけの匂いにはなって居ない。

香りを合わせて香を作るのは、難しいので錬金術師はあまりやりだから無いが私はこれが得意だった。

「いくらだい？ 今後も此処にしか売らないなら言い値で買っよ」

専売にして、「酔楼亭」の香りにするつもりのように。客がこの匂いを嗅ぐたびに酔楼亭に来たのだと嗅覚からも訴えるつもりだよだ。

「お代はいらない。その代わり願いを叶えて欲しいんだ」

私の提案に、ローズマリーは真紅に染め上がった唇を三日月のように楽しそうに上げた。瞳が楽しそうに笑っている。

「良いでしょう。このローズマリーに願いを仰い。叶えられる限り叶えよう」

ローズマリーは、自信たっぷりに羽根つきの扇子で扇ぎながら答えた。

「一週間後に行われる貴族の宴に参加したいの」

「面白そうだね。条件付きで叶えよう」

ローズマリーは、いたずらっ子のように笑った。

あり得ない！あり得ない！

条件付きというから、もつと違う事だと思ってた。「目立たないようにしろ」とか、「付き人としての礼儀を覚えろ」とか。

全然違った！

交渉もうまくいった、と浮かれていた一週間前の私を殴りに行きた

い。
私は、貴族の子息が集まる宴に潜入するために再び酔楼亭にきていた。数日前、ローズマリーの使いが家に来て準備があるから早めに来るよう言われた。

着いてそうそう、空き部屋に通され酔楼亭の従業員たちの手によってあれよこれよと着替と化粧を施された。

衣装は、心もとないほど薄い布でお腹と背中と腕と鎖骨が露出していた。

寝るときでさえ、こんなに薄着になった事はないのに。露出が多すぎる。

私は、単なる付き添いを希望したのにローズマリーは、私を高級娼婦にしたて上げるつもりようだ。

続いて、宝石が惜しげも無く使われた耳飾り、首飾り、足飾りを身に纏う。同時に髪の毛を結い上げたり、爪の色を染めたりと全身磨

き上げられた。

ようやく、姿見の前に連れて来られて始めて全身を確認した。

誰これ、と言いたくなるほど私は変わっていた。

少なくとも、城下で錬金術のお店を開いているようには見えない。

誰か、貴族に愛人として囲われていそうな雰囲気だ。

ローズマリーが部屋にやってきて、私の姿を上から下まで値踏みするようを見た。

「さすが、私の見立てだね。良く似合いだよ」

ローズマリーは、満足そうだ。私は地味な露出の少ない服に変えて欲しかったが、ローズマリーの満足そうな表情に否をいう事ができない。それに、連れて行ってもらうにはいう事を聞くといい条件がある。

「そろそろ時間だから、行っておいで」

ローズマリーの楽しそうな声に後押しされて私は、数名の高級娼婦たちと共に城へ向かった。

星降る森の約束9

お城では、重要な催し物があると言っていたけれど、何が行われるのだろう。

私たちがお城に到着したときには、家紋入りの馬車が沢山城門へ入って行くのが見えた。私たちは、酔楼亭の紋入りの馬車に乗っているの、門番から厳重な確認を受けたが、家紋入りの馬車はそのまま通過して行った。

よほど、身分の高い人達かもしれない。

私は、上級貴族の嗜みである紋章学をきちんと学んでいない。学ぼうとする前に、家を出たからだ。だから、物凄く有名な家紋が数個分かるくらいだ。

いま、門前で確認されている最中に追い越して行った馬車の家紋は、私でも分かった。

あれは、上級貴族の中でも最も貴い身分と言われている「六貴族」のうちの一つ、「ヘスペルス家」だ。一族からは、宰相を何人も輩出する文官一族だ。

いまは、違う家の人が宰相だけれど。

そのヘスペルス家の人が家紋入りの馬車に乗って登城するなんて何があるのだろうか？

私たちの身分確認が終わり、王宮までの道をゆつくりと馬車が走る城内では、慣れているらしいローズマリーの後について歩いた。ローズマリーとは初めて会ったけれど、こんな美人が居たのか！と思わせるほどの絶世の美女だった。オマケに頭が良い。

やはり、高級娼婦ともなれば学問も収めるようだ。

「ビルイムは、私から離れないでね」

？ローズマリーは、私を振り返って優雅に笑った。

？ビルイムは、私の偽名でこの商売用の名前としてローズウッドに付けてもらった。

??ビルイムは、蕾と言う意味だから「蕾ちゃん」と呼ばれている。
なんだか気恥ずかしい。

??ローズマリーが先頭となって、並んで歩いて到着したのは王城
の中心から離れた一室だった。

?? 何に使われる部屋かわからないけれど、あまり飾り気のない
扉で部屋の中は王城の割には狭いようだ。実家には、これより広い
部屋がほとんどだったと思う。

?? その王宮では狭いと思われる部屋に、毛の長い絨毯が引かれ、
クッションが無造作に沢山置かれていた。クッションに寄りかかる
人、抱えて座っている人、寝転がっている人、思い思いの体制で、
くつろいでいる。大体、十五、六人だろうか。みんな、同じ年代ぐ
らいで、着ている服が高級品だ。

?? 貴族の坊ちゃん達のたまり場なのだろうか。

?? 王宮に仕えているとは思えない、年の若さに見えるし。十代
後半ぐらい。

「ようこそ、待っていたよ。さ、ローズマリーはコッチだ。後は、
適当に散らばれ」

?? 無気力そうにクッションに座っている男達のリーダー各の男
が一人、立ち上がってローズマリーの手を取るとジブリの方へ引き
寄せた。

?? そういえば、この部屋なんだか変わった匂いがする。甘い匂
いなのだけれど、お香でも焚いているのかな？

?? 私は、何処に座って良いのか分からずキョロキョロしている
と、一人の男に手首を掴まれた。

「なに、君、初めて？」

?? 随分と馴れ馴れしく口をきく奴だな。

?? 私は、明らかな作り笑いで応じた。

?? 男はニヤニヤ笑いながら私の手を取って、男達がいたと思わ
れる輪に入らされる。

?? 来ている服は高級品で、言葉の発音も上級貴族のものだ。だ

けど、貴族の若君には見えないのは、何故かしら？話し方とか、服の着方とか？

?? なんだか、やけに着崩しているし、むやみやたらと私の体にも触れてくる。

?? なんとか、体を触れられるのを避けながら辺りを見回すと、香炉を見つけた。

?? 一個どころではなくて、何個も香炉が部屋のあちこちに置いてある。

?? 香炉の大きさは、卓上用の一般的な大きさと掌より少し大きいぐらい。

?? この部屋なら、何個も必要性ない。二個もあれば十分だろう。

?? あれ、なんで香炉が沢山あるの……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5654n/>

星降る森の約束

2011年5月14日12時35分発行